

令和3年度 公立鳥取環境大学  
学校推薦型選抜（I型）問題

小 論 文  
(経営学部 90分)

(注意事項)

1. 解答開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は2ページ、解答用紙は2枚です。
3. 解答用紙の所定欄に受験番号、氏名を記入しなさい。
4. 解答用紙は横書きです。
5. 試験終了後、問題冊子と下書用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、問いに答えなさい。なお、解答の際、句読点、「」、()、も1字と数える。

超一流の達人は、質の高い練習を長期間にわたって毎日欠かさない。そういう姿を見ると、達人になるには、たゆまぬ努力が必要なのだと思われる。とはいえ、そう思いながらも、「やっぱり最後は生まれつきの才能だ」と多くの人が信じているのではないか。努力か、才能か。この問題を科学的に検証するのは難しい。まず、「才能とは何か」をきちんと定義しなければならない。

「才能」ということばは、複数の異なる意味で使われているので要注意だ。才能は「すぐれた能力」という意味でよく使われる。その時には「持って生まれた」とか「生まれつきの」という意味合いはとくに必要ではない。そのような意味で「才能」ということばが使われることに問題はないと思われる。

ところが、「努力か、才能か」という問い方をするときは、才能ということばは「持って生まれた能力」という意味合いを持ち、「努力では到達できない能力」という意味合いが強くなる。(1)この二番目の使い方は、実体のよくわからない漠然とした意味で使われているので、私には気持ちが悪い。

非常に優れた数学者や科学者になるための才能、優れたスポーツ選手や音楽家になるために必要な生まれつきの才能、チェスや将棋や囲碁の名人になるための才能、大企業の経営者として成功するための才能とは、それぞれ何だろうか。スポーツ選手の優れた運動能力は、持って生まれた反応の速さや動体視力などの資格能力の高さが関係していると考えられる人は多い。これが一流のスポーツ選手になるための才能なのだろうか？あるいは（それが何であれ）高性能の筋肉、肺、心臓などをつくりだすための「遺伝子」のようなものがあるのだろうか？

達人たちは、自分の分野で必要なことに関しては驚くべき記憶力を持つ。では、よい記憶力を持つことが才能なのだろうか？将棋や囲碁の達人になるには「思考力」が最も大事だ。すぐれた記憶力や思考力を生むための遺伝子が存在するのだろうか？一流の音楽家の多くは絶対音感がある。生得的に備わった絶対音感が一流の音楽家になるための条件であると信じている人は多い。それはほんとうなのだろうか？

才能が大事というからには、才能はごく少数の達人（「天才」と呼ばれる人）たちを生み出す原因でなくてはならない。結果ではない。しかし、「才能」の話はとかく、その達人がどのような遺伝的な素因を持っていたかという観点から語られる。一方で、「天才」や「抜きん出た達人」が、たゆまぬ努力をつづけていることも紛れもない事実である。

棋士の羽生善治さんが子どもの時から、常に己を律してストイックに努力を重ねてきたこと、独自の勉強法を模索しつづけてきたことは、ご自身や長年お付き合いのある方たちの回想などで明らかにされている。

野球のイチロー選手はどうだろうか。彼はインタビューで、小学生のころどのように練習していたかを語っている。イチロー選手は小学生のころから毎日バッティングセンターに通っていた。しかし、ただ普通にバッティング練習をしていたのではない。小学生のイチロー選手（というより子どものイチロー君）は、マシンのスプリングを目いっぱい硬くしてもらって、できるだけ速いボールが来るように調整してもらっていた。それでもプロが投げる球の速さではなかったので、バッターボックスの外に出て、より近い距離でボールを打ち、「プロはこのくらい速いボールを打っているのだ」と計算しながら練習をしていたそうだ。

このように、超一流の人は、超一流のパフォーマンスをするために、小さいころから質の高いトレーニング方法を模索しつづけ、実践しているのである。また、実践をしながら集中力の緩急の付け方、時間の配分のしかたも同時に学んでいる。

しかし、彼らと同じように小さいころから毎日練習していても、誰もが超一流のレベルに届くとは限らない。では、超一流のレベルにまで到達する「天才」と呼ばれる人たちには、いったいどんな特徴があるのだろうか？

幼少のころから能力を発揮し、「天才」と呼ばれた人たちの自伝や様々な資料をもとにした研究の中には、天才たちの特徴は能力的なものよりむしろ、性格的なものであることを示しているものがある。のちに天才と呼ばれた人たちは、音楽にせよ、絵画にせよ、その分野で小さいときから極度なモチベーションを示すことが普通である。そういう「意志の強さ」を才能と呼ぶこともある。羽生善治さんは才能について問われると、「ひらめきやセンスも大切ですが、苦しまないで努力を続けられるということが何よりも大事な才能だと思いませんね」と答えている。

たしかにその通りである。子どものころから何かに打ち込み、学校や近所の同年代の子どもが遊んでいるときに練習に励むのは、普通の感覚では簡単にできることではないかもしれない。しかし、問題はそのような意志の強さ、粘り強い性格が、生まれつきの素因で決まるか否かだ。

何かが好きで始めてみて夢中になり、練習すればするほど向上することがわかり、さらに練習するようになる。さきほど述べたように、練習に工夫を重ねること自体が喜びになり、生活の一部になる。(2)このようなサイクルがあるとすると、そのような性格を「特段にすぐれた能力」という意味で「才能」と呼ぶことはかまわない。しかし、環境や努力と切り離された「生まれ持った素質」という意味で呼ぶことに、明確な科学的裏付けはない。

(出典：今井むつみ『学びとは何か』2016年岩波書店 一部改変)

問1：筆者が下線部(1)のような印象をもつ理由について、170字以上200字以内で説明しなさい。

問2：筆者が下線部(2)のように考える理由について、120字以上150字以内で説明しなさい。

問3：才能と努力の関係について、筆者の主張や文中の事例を適宜引用し、あなたの考えを700字以上800字以内で述べなさい。